

TOYAMA KAZUYUKI MEMORIAL ARCHIVES
OF
MODERN JAPANESE MUSIC
LECTURE CONCERT SERIES

日本近代音楽館レクチャーコンサートシリーズ

VIII

オリンピックと音楽

- 山田耕筰
走れ大地を
オリンピック派遣選手応援歌 (1932)
- 諸井三郎
オリンピックからの三つの断片 (1936)
- 江文也
台湾の舞曲 (1934)
- 古関裕而
オリンピック マーチ (1964)

ほか

演奏 アンサンブルTCM
お話し 渡辺裕

2019年

12/14 (土) 14:00開演 [開場13:30]

明治学院大学白金キャンパス
アートホール

入場無料 要予約 [11月11日(月)から受付開始]

予約受付 東京コンサーツ

Tel: 03-3200-9755 (平日10:00~18:00)

Fax: 03-3200-9882

主催

明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館

制作協力

東京コンサーツ



オリンピックと音楽

音楽はオリンピックにつきものである。2020年の東京大会開催にあっても、開会式に誰が出演し、どのような音楽が演奏されるのかは、興味の焦点のひとつになっている。だがオリンピックにとって音楽は、単にイベントを盛り上げるために使われているわけではない。それどころか、音楽を含む「芸術」はある時期までオリンピックの競技種目にすらなっていたのであり、その背景を探ってみれば、それが近代オリンピックという存在やその理念と分かちがたく結びついていたことが明らかになってくる。

今回のレクチャーでは、そのような背景の考察を通してみえてくるオリンピックのひとつの側面を明らかにするとともに、そのような状況の中で日本人の音楽家たちが、このオリンピックという行事にどのように関わろうとしてきたかを中心に考えてみたい。日本人音楽家の側からみればオリンピックのような場は、自らの文化の針路を定め、世界の中に地歩を占めてゆくための絶好の機会でもあった。

とりわけ、空前の「国民的行事」となった1964年の東京大会は、現在という地点からあらためて振り返ってみることで、戦前から戦後へ、そしてその後の時代へと、日本における「国民音楽」をめぐる動きがどのように展開し、またそのあり方をどのように変容させてきたのかを考えてゆくための絶好の切り口となるだろう。

- I 1936年ベルリン大会：オリンピックにおける「芸術競技」と日本人作曲家たち
- II 1964年東京大会：天皇陛下の入退場に使われた黛敏郎の「電子音楽」
- III 1936年から1964年へ：山田耕筰と古関裕而にみる「国民音楽」の盛衰

渡辺 裕

2019年
12/14 (土) 14:00開演 [開場13:30]
明治学院大学白金キャンパス アートホール



明治学院大学 〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

- 品川駅 [JR/京浜急行] 高輪口より都営バス「目黒駅前」行「明治学院前」下車 または 駅より徒歩約17分
- 目黒駅 [JR/東急目黒線/東京メトロ南北線/都営地下鉄三田線] 東口より都営バス「大井緑馬場前」行「明治学院前」下車 または 駅より徒歩約20分
- 白金台駅 [東京メトロ南北線/都営地下鉄三田線] 2番出口より徒歩約7分
- 白金高輪駅 [東京メトロ南北線/都営地下鉄三田線] 1番出口より徒歩約7分
- 高輪台駅 [都営地下鉄浅草線] A2番出口より徒歩約7分



渡辺 裕

WATANABE Hiroshi

1953年千葉県生まれ。1983年、東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学)博士課程単位取得退学。博士(文学)。玉川大学助教授、大阪大学助教授、東京大学教授などを経て、現在、東京音楽大学教授、東京大学名誉教授。2013年、紫綬褒章受章。専門は聴覚文化論・音楽社会史。日本近代音楽館収書委員。

主な著書は『聴衆の誕生—ポストモダン時代の音楽文化』(1989年、サントリー学芸賞)、『日本文化 モダン・ラプソディ』(2002年、芸術選奨文部科学大臣新人賞)、『歌う国民—唱歌、校歌、うたごえ』(2010年、芸術選奨文部科学大臣賞)、『サウンドとメディアの文化資源学—境界線上の音楽』(2014年)、『まちあるき文化考：交叉する〈都市〉と〈物語〉』(2019年)ほか。

「オリンピックと音楽」という今回のテーマとの関連では、『感性文化論：〈終わり〉と〈はじめ〉の戦後昭和史』(2017年)において、日本人の感性のあり方が1968年前後を境に大きく変容したことを論ずる中で、1964年に行われたオリンピック東京大会を取り上げ、それがむしろ「戦前」的な感性や心性の延長線上に成り立っていたことを明らかにしている。

アンサンブルTCM

東京音楽大学博士後期課程の学生を中心に結成されたアンサンブル。毎年研究テーマを設定し、音楽学や音楽教育学を専門とするメンバーも加わって共同研究を行い、その成果をレクチャーコンサートなどの形で発表する活動を行っている。



栗原光太郎
(テノール)



陳 金
(ヴァイオリン)



竹内 彬
(クラリネット)



保崎 佑
(ファゴット)



森杉美希
(ピアノ)



安並貴史
(ピアノ)